

はじめに・地図

神戸には、平清盛についての伝承及び記録が数多く見られる。これは、清盛が大輪田泊をつくり、福原に遷都したのが機縁である。清盛は、福原に滞在のおりには、季節ごとの館を構え、その中でも冬に滞在したといわれているのが雪御所(注1)である。その雪御所から清盛が丹生山の明要寺(山王神社)に月参りした(注2)道が鳥原古道(注3)といわれる道である。

この小論は、その清盛が丹生山に参詣したといわれる道を資料・伝承等を調べながら、鳥原古道といわれている道を実際に踏査した記録である。

地図



1～3:	鳥原越え
4～7:	石井町
8～9:	鳥原
10～20:	鈴蘭台
21～27:	丹生山
28～29:	追記・注

烏原越え

兵庫区4丁目の交差点の角に、東山追分地蔵(写真1)があり、ここから藍那道と烏原越え道とに分かれていたといわれる。右に行けば石井、烏原、山田。左に行けば、夢野、三木という道標もある。ここから右にとると、現在「ダイソー」に出るが、そこに大きな木が道の真ん中に残っている(写真2)。このお陰でここが昔、旧湊川の堤のそばであることが分かる。烏原越え道(注3)は、この堤の東側に沿って北上する。東山商店街を抜けた東山 一丁目辺りにも木が一本残っている(写真3)。この辺り道が一段高くなっており、昔の堤の名残を残している。この道を北上していくと、現在の湊川と合流する。つまり、この辺が現在の湊川と旧湊川の分岐点である。ここから湊川沿いに北上すると、右手に荒田小学校、運動場が見えてくる。



写真1.東山追分地蔵



写真2.道の真ん中に残された木



写真3.東山町一丁目の大きな木

石井町

雪御所公園の南側で湊川は、石井川と天王谷川に分かれる。もちろん、烏原越えは石井川の東側を北上する。(写真4)大同町一丁目に、地蔵さんが二つ(写真5、6)あり昔、この前が街道であった証拠と見ることも出来る。都由乃町、千鳥町を経て烏原に至るが、この辺の道は定かではないが、急な坂(写真7)があり、ここを登り烏原貯水池に出る。都由乃町の名前の由来は、山田荘と関係があるので古代からこと山田庄とを結ぶ道(注5)の存在が想像される。



写真4.石井側から
烏原越えをのぞむ



写真5.大同町1丁目の
地蔵様



写真6.大同町1丁目の
地蔵様



写真7.烏原越えの切通し

烏原

現在の烏原(からすはら)は、石井川支流烏原川の渓流沿いに貯水池になってしまい、昔の烏原村、そして烏原川沿いに道が見える。願成寺にある明治時代の烏原村を描いた絵によれば、現在の烏原貯水池の東側に道があったと思われ、道幅は、荷車が通るほどの幅と推定される。何故なら、烏原村は昔から山田の米を精米するのを生業としてきたからである。

ここから北は烏原川沿いに道があったと思われるが現在、大部分は神鉄の線路と烏原川の間に挟まれ、道と認められない箇所も多々ある。(写真8)

そして、この道の大部分が石井ダムの完成によって水没してしまうのも時間の問題である。神鉄の線路沿いに北上を続けると、途中「妙号岩」という崖に彫られた文字が見られるはずであるが、現在では木々に囲まれてか、角度が悪いのか見えない。(写真9)

昔は、旅人の安全を祈って彫られたものであるから、烏原越え道から見えたはずである。

この神鉄の線路一帯は四方を山に囲まれ、周りは木々と川のせせらぎばかりであり、夜にでもなれば、旅人にとっては怖いところであると想像される場所である。



写真8. 烏原川を北側から望む。
右側は、神鉄菊水山駅付近



写真9. 神鉄の線路際から南を望む。
右側の山が妙号岩

鈴蘭台

山中を抜け、神鉄の車庫前に来ると、鈴蘭台の住宅地が目に入ってくる。この神鉄の車庫前には、何年前まで道標があり、そこには「左 丹生山 右 小部村」と刻まれていたという。現在は、稲荷神社に在るので調べに行ったが、見つからなかった。しかし、現在の神鉄車庫前辺りで、烏原越え道が丹生山への道と小部村への道(注5)に分かれていたのがわかる。江戸時代天保年間の地図にも、烏原川沿いに西小部までの道が見える。さて、ここからの丹生山への道であるがよくわからない。このあと線路伝いに鈴蘭台駅方面に行き、そこから尾根道(現在では両側に小学校、マンション、住宅地が広がっている(写真10))に入り、神鉄栗生線を跨ぎ 杉尾神社方面に抜ける。現在では、ここに長田箕谷線が通っているが、この近くに小部の千年家という古い邸宅があり、この御主人内田さんのお話、江戸時代の古地図によると、この内田邸の裏を街道が通っていたという。極楽寺(写真11)の前から萬福寺の前を通過して、山田の原野に達していたということである。萬福寺の御住職の母堂(百歳になられる)のお話では、萬福寺の裏の道(写真12)から原野に行ったことがあるとのことでした。現在、この道は「徳川道(注6)」といわれているが、近年、通る人もいないようで、実際この道を歩いてみると、入ってすぐ、道は木々に覆われ、わからなくなっている。



写真10. 鈴蘭台の尾根道の下を
神鉄が通っている



写真11. 極楽寺



写真12. 万福寺の徳川道の入口

そんな道を迷いながら進むと程なく尾根道に辿り着く。ここまでくると、人の通れる道になっており、甲柴台の団地のところで途切れている。現在は、この西側を長田箕谷線が原野方面に抜けている。原野方面からも丹生山には行けるが、北五葉から長坂山に抜けるのが丹生山に行く道だということである(注3)。現在、谷沿いに杉尾神社から北五葉に抜ける道はあるが、江戸時代の地図にはない(写真13)。また、杉尾神社から泉台に抜ける道も長田箕谷線が出来るまではあったが、これも古地図には見当たらない。長坂山の道は現在でも一部が「太陽と緑の道」ということでハイキングコースになっているが、北五葉から長坂山に入る道は現在わからない。北五葉の北端、泉台の入り口付近に墓場(写真14)があるが、相当古い墓も見受けられる。



写真13. 杉尾神社と長田・箕谷線を南側から望む



写真14. 北五葉にある共同墓地

現在この付近は、宅地造成が盛んに行われており、その為に長坂山への道がわからなくなったと思われる(注7)。しかし、新しい宅地の裏に古い道がのぞいているので、そこを手掛かりに山中に分け入ると、すぐに木々が道を遮り、迷ってしまう。辛抱強く進むと、尾根道に出、その道を進んでいくと田んぼに出てしまう。そこから道なりに進むと、阪神高速北神戸線の藍那インターに出る。ここでまた道が途切れてしまうが、高速道に沿って北に上がると、又山中に分け入ることになる。ここも入って百メートル位は道が分かるが、そこから先は笹が繁殖していてわからない。その笹を掻き分け、掻き分け進んでいくと、道が現れるが、ここも左右から笹がはみ出しており、背を丸めたり、顔に当たる笹を払ったりしながら進んでいくと、前方が全く開けない状態になってくるが、辛うじて坂道のところに木の段があるのでそれを目印に登ることが出来る(写真15)。尾根に出ると、まともな道になる。この道を進んでいくと、長坂山山頂の付近で、藍那からの道に合流する(写真16)。



写真15. 笹が生茂る長坂山の道



写真16. 長坂山の道



写真17. 東下へ行く分れ道

この道は「太陽と緑の道」になっており、標識もあり整備された道である。ここからは、丹生山まで快適なハイキングコースである。しばらく行くと、山田町東下に至る道(写真17)と八幡神社に至る道とに分かれるが、東下に至る道は高圧線のところで消えている。東下に抜けたほうが丹生山に近いので、この道が本道かと思う。山を降りてなだらかな道を進んでいくと、道の両側に田んぼが見えてきて、集落が程なく現れてくるのを予感させる(写真18)。東下の集落の手前に七社神社(写真19・注8)があるが、五輪塔(写真20)の形からその古さを伺えることが出来る。



写真18. 東下から望む丹生山



写真19. 七社神社



写真20. 七社神社前の五輪塔

丹生山

東下(ひがししも)から丹生山(たんじょうさん)の山麓までの道は現在、バス道になっており、スムーズに烏居前までたどりつく。ここからが丹生山の登り口である。志染川(しじみがわ)の橋を渡ると、丹生宝庫の前に出る。ここから(写真21)登り道になり、安全を祈願するための地藏様があり、ここから丁石(ちょうせき)も始まっている。

この道は一丁(約百m)ごとに丁石があるので、快適な登山道になっている。所々舗装されているところもあり、多くの人が今でも利用している道である。

丁石は、長年の歳月のため彫られた字が判読できないものも、あるいは、頭部が欠けたものもあるが、数は揃っている。(写真22) もちろん、この丁石は清盛の頃のものでなく、後世のものである。山頂に近づくとつれ、道の両側に、石垣が見えてくる。(写真23) 昔、坊が百もあったといわれているが、それらの石垣であろう。



写真21. 丹生山の登山道



写真22. 丁石



写真23. 山頂近くの石垣

頂上に着くと、ひときわ立派な石垣があり、(写真24)神社の裏には、秀吉が焼き打ちした時の木が焼け焦げて残っている。(写真25) 山頂の手前から箱木千年家方面に抜ける道があるが、いわゆる義経道である。(写真26) この道も相当古くからの道と見えて、途中に古い墓石がある。(写真27) 清盛が登った丹生山への道と義経が鶴越えをする道が、この丹生山で交差していることが事実とすれば、ロマン溢れる話であるが、実際、この道を歩いてみると、途中険しい尾根道があり、とても馬が越えられる道とは思われない。又、この当時、清盛没後とはいえ、清盛に恩義を感じている筈である丹生山の僧兵が、やすやすと義経一行を通すはずはないと思われる。



写真24. 山頂の石垣



写真25. 焦げて焼け残った木



写真26. 義経道



写真27. 義経道の古い墓石

おわりに

兵庫区の東山町から烏原古道といわれる道を丹生山まで踏査してみると、現在の道からはとても判断できない道もあるが、逆に昔の道筋に今日の道路が拡張された形で残っている場合もある。山に入れば、昔のままの道が多い事にも気付く。ただ、利用されなくなった道は、木とか笹が生茂り、その道の入口さえ見つけられないところもあった。このままでは特に、北五葉から長坂山を抜けて行く道と、烏原川沿いの道も石井ダムの完成によって、消えていく可能性がある。早急に手を打たなければ、分らなくなっていくだろう。

長坂山の藍那から来る道は「太陽と緑の道」という事で道標も完備されているが、そこからの脇道である長坂山から北五葉までの道を整備するのが急務である。このままでは「烏原古道」は全く忘れられた存在になってしまう。

結論としては、清盛の丹生山への月参りは、なかったのではないかと。月参りをしていたというのは、明治時代の資料に出ているだけで、それ以前の記録はなく、他は伝承の類だけであり、平家物語とか、当時の資料には全く残されていない。願成寺にも清盛の話は残っていない。本当に月参りをしたなら、烏原村と山田の里に記録が残っていてもいいはずである。

しかし、一度ぐらいは、参詣した可能性は否定できないと思う。どちらにしても、兵庫の石井と山田を結ぶ烏原古道は清盛の前から存在しており、もし清盛が丹生山に参ったとすれば、この道しか考えられない。

最後に、今回の調査についてご協力頂いた次の方々に感謝をして、この小論を終わりたいと思う。一緒に踏査に参加して色々とお教授頂いた上高丸小の大木先生、小部の萬福寺の御住職の奥様、小部の千年家の内田さん、願成寺の御住職、資料を提示して頂いた兵教大の河村先生、金蘭千里短大の水田先生、神鉄の資料室の皆様。

追記・注

この踏査は、阪神淡路大震災の前年に行ったものである。今回、WEB化するにあたり平成16年に再度、踏査したが、石井ダムの建設工事のため、菊水山駅より北へは行けなくなっている。泉台からの入口も立ち入り禁止(写真28)の看板がかかっている。そこを無理に入って、長坂山のとりつきまで行ってみたが、「太陽と緑の道」(写真29)も最近は来る人もいないようで熊笹が繁茂しており、昼間であれば、なんとか通行できるが、日が傾いてくれば大変恐い危険な道になっている。



写真28. 泉台入り口。立ち入り禁止(平成16年)



写真29. 太陽と緑の道(平成16年)

注1	<p>中上房雄『山田郷土誌(第二篇)』(山田郷土編纂委員会・昭和五十四年)の五一頁に「春は花見の岡御所で、夏は船見の浦御所で、長田区尻池にあった寺山に、秋は月見の浜御所で、野田の字福原に、冬は雪見の御所で、兵庫区の平野にあった。」とある。</p>
注2	<p>福原潜次郎『山田村郷土誌』(山田村役場・大正九年十一月十日)の六五頁に、丹生山明要寺のことを「山内百ヶ坊を有し、治承年間には平相国清盛摂州福原の別業に居り後には都を此地に遷さんとするや、丹生山鎮護の日吉大権現を信仰し、毎月必ず月詣でをなしたりとて神戸烏原谷には最近まで丹生山までの里程標たる町佛の存せしものあり清盛が當山を信仰せしは事実として見るべく、山田庄は遷都の當時供御の地に充てられ、王城鎮護の日吉山王を丹生山に擬したるは、正に然るべき事実となりとす」とある。</p> <p>なお、平家物語には日吉社、山王、日吉、山王大師という「日吉山王権現」を表す言葉が十九も見られ「日吉の神恩にあずかり」、「山王大師の神慮も憚らず」、「山王大師のお力をたのむより」等の表現もあり、清盛がいかに日吉山王権現に帰依していたかが分かり、神戸の地に日吉社に代わる山王権現を求めたとしても、不思議はないと思われる。</p> <p>また、『神戸市紀要「神戸の歴史」』(神戸市企画調整局文書館・一九八五年版第二十号)によると、室町時代後期の作と云われる「明要寺参詣曼荼羅」には、仁王門、食堂、大日堂、三重塔、拝殿、本堂など多数の堂塔がみられるとあり、「百ヶ坊」という表現もあながち誇張だとも言えない。しかし、『平家物語』にも中山忠親の『山槐記』にも、清盛が丹生山に参ったと云う記述はない。</p>
注3	<p>丹生山に至る烏原古道については、次のようなルートが考えられている。</p> <p>山下道雄『神戸の道標』(神戸新聞出版部・昭和五十九年)の二七頁によると「烏原谷越えは永沢口(現・永沢町)を出て川池の東堤(現・湊川公園内)を通り、追分け地蔵を過ぎて石井村西部から住蓮坂を越えて烏原村へくだる。これより烏原谷を遡って西小部の萬福寺前をすぎ、山田村の原野方面または東下に出る。」とある。また、社山悠と風土記の会が、昭和五十三年一月十六日に行った踏査ルートは、平野→石井川→菊水山の西の谷→小部→北五葉→田ノ尻→長坂山の峠→奇観谷→</p>

	<p>七社前→丹生神社である。</p> <p>そして、古地図で烏原道を確認すると次のようなものである。仲彦三郎『西撰大観』(明輝社・明治四十四年)の古城社古戦場の源平戦況図を見ると、湊川、石井川沿いに「烏原越」の道が見える。同じく湊川戦闘略図にも湊川から石井川・烏原村へ抜けている道が見える。また、『元禄九年兵庫之図』には、湊川右岸に丹生山への道が描かれている。</p>
注4	<p>仲彦三郎『西撰大観・上巻』(明輝社・明治四十四年三月)の六五頁によると「奈良時代には山田の郡司真勝なるもの横佩大納言豊成の息女白瀧姫をめとり此の地原野村に住し、栗花落家と称し地方の名族たり」とあり、都由乃町の名前の由来には、</p> <p>「七六四年(天平宝宇八年)の昔、丹生の山田(現在の北区山田町)にいた矢田部郡の郡司山田佐衛門尉真勝は、藤原豊成ノ二女白瀧姫を恋した。天皇が仲をとりもって夫婦にした。ちょうどそのころ、栗の花の落ちる梅雨だったので、天皇が栗花落(つゆ)の姓を贈った」という伝承があり、真勝と白瀧姫は山田へ帰る途中、石井村の北の森で休んだとも伝えられている。</p> <p>これらの記述からも石井町(現在の兵庫区)と山田を結ぶ街道が昔からあったと思われる。</p>
注5	<p>仲彦三郎『西撰大観・郡部』(明輝社・明治四十四年十一月三日)の五八頁によると「烏原より小部へ出で東下村に出づる道は往古の国道なりし」とあり、烏原越えの道が昔から存在したことを物語っている。</p>
注6	<p>明治四十三年測量の二万分の一地形図(丹生山)で見ると、東小部から原野に抜ける道が認められる。江戸時代天保年間の地図にも東小部から中村八幡に抜ける道が見える。</p>
注7	<p>注6の地形図には北五葉から長坂山へ抜ける道が見える。</p>
注8	<p>『兵庫県神社誌・上巻』(兵庫神職会・昭和十二年三月三十一日)の四六九頁の村社七社神社の項によると「山王権現社近江国滋賀郡に祭る神に同じ明要寺記に云欽明天皇の御宇百済国童男行者の勤請也上の七社は當山にあり土俗号七社大明神中の七社は播磨国下の七社は山田の庄内にあり都て二一社を當山鎮守神とす」とあり、明要寺と七社神社の関係は深いように思われ、丹生山への道はこの神社のそばを通る道が本道だと思われる。七社神社は現在の東下に移る前はもっと東側にあったといわれている。山田の中心は、原野にあったと思われるので、長坂山の一番東よりの道が本道とも考えられる。</p> <p>また、前掲書『山田村郷土誌』の六六頁には「平清盛都を福原に遷すや、内裡供養の調進は山田の郷専ら是れに任じたり」とあり、清盛と山田庄の関係が深かったと想像され、清盛が丹生山に参る際にも山田庄の接待等が考えられるので、山田庄の中心地を通してそこで休憩したとも考えられる。</p>